

本多・山口・津村論争について

—— それでも探検をつづける者の眼 ——

西 田 信 隆

I

論争のはじまりは、「思想の科学」1970年6月号の特集「入門以前」に文化人類学を担当して書いた本多勝一氏の「調査される者の眼」である。その中で本多氏は、人類学と侵略との結びつきを鋭く指摘し、歴史的に人類学が果たしてきた犯罪性を告発すると同時に、今日でも、ベトナム戦争に加担する人類学者を例に引いて、人類学の調査とは、帝国主義の政策科学としてしか機能していないのではないかと疑問を投げかけたのである。ニューギニア高地人、エスキモー、アラビア遊牧民と探検ルポを続けて、その後のベトナムルポを終えた時点で「調査される側」に立とうとする本多氏の姿勢及び告発は、60年代終盤の全共闘運動が学問の犯罪性を真摯に問いかけたことと通じるかのようなところもあり、一見カッコよかった。

II

これに人類学者の側から反論を提したのが山口昌男氏である。山口氏は「展望」のその年10月号に「調査する者の眼」と題して、意気っている本多氏をサラリとかわし、本多氏の立つ基盤、すなわち「大朝日」の商業主義的構造とその看板スター本多氏とのかかわりを明らかにして、やや意地悪くおちょくった。「正義の味方」面して得意気に、他人ごとのように人類学を批判する資格はない、と。

しかし、反論すべきところはしっかり反論している。人類学と帝国主義との関連は全くその通りであるとし、一般論的に片づけてしまうのではなく、「異質の文化」を媒介にして西欧の価値観を個別に破壊していこうとする人類学の積極的な面を強調している。しかし、本多氏の提起した問題には、あまり説得力豊かに答えていないように思える。これも意地悪くとれば、個人的意識変革のみを求めているように排他的、居直り的な感じがしないでもない。それは、大状況云々、体制云云することの空しさを知っているからかも知れない。「正義の味方」本多氏を反面教師として…。

この山口氏の反論に対して、「展望」1971年8月号に「殺す者の眼」と題名からも察しがつくように、かなりヒステリック対応している。逆上しているかのように惜しげなく個人攻撃を浴びせかなりあさはかに朝日と自分との関係を自己弁護している。

それに対して山口氏は黙殺し、本多氏の一人相撲に終わった感をまぬがれない。

III

その泥試合の後、津村喬氏が「中央公論」1972年2月号に「同化する者の眼」と題した論文を発表した。津村氏は「探検」にも「人類学」にもあまり関係のあった人ではなく、「入管」闘争を通じて、侵略、被侵略との関係を考えつづけてきた新左翼の若き理論家である。

その論文の中で、侵略民族が、被圧迫民族の

「立場に立つ」というのはどのような状態、もしくは行為を指すのだろうかを問いつづけ、ラポール「津村氏は広く（同化）としている」の意味を本多氏の立場と山口氏の立場相方から検討している。

山口氏は、「大朝日」と本多氏との関係を皮肉をまじえて述べていたが、津村氏は正面から、より厳しく糾弾している。

「被抑圧民族の立場に、イデアルに同化して批判の視座を把んだと思ひ込む時、その言葉は一種のメロドラマである」と。

まことに鋭く指摘している。このあたりのことにふれて本多氏は「諸君」1972年4月号で「雑音でいじめられる側の眼」の中で、津村氏のこの論文をのせた編集者の見識が問題であると、これまた奇妙な批判のしかたをしている。それにこうというのが雑音と聞こえるようでは、本多氏も、もうろくしたのか、それともファシストに……。

津村氏は続いて「探検ブーム」について言及する。「いかなる目的であろうと、極論すれば目的など持たなくても、日本の青年が地球上にあふれるほど出てゆくことを勧める本多氏の楽天主ぶりを非難する。「同化の論理を問うことのないままに出かけていく者たちが、どのような水準において異質なものの考え方に接しうるのであるか」と。現代における「探検ブーム」の犯罪性を津村氏はいみじくも指摘しているのである。

次に山口氏を含む人類学者の「同化」の意味を探っている。東大で文化人類学を専攻する院生の清水昭俊氏の論稿「山口氏のいうように、フィールドで真に創造的な自己解体を体験したとしても自国に帰ったときには、人類学者は知の領域でしか『人類学的』でない」を受けて、「異質な文化との出会いに関して、われわれは今や何を提案しうるのであるか」を自問している。そして、「異

化を前提にした同化、同化に促される異化」のサイクルの重要性から、人類学者は、学者であることをやめない姿勢において、自ら人類学的「全体」への道を絶っているのだということを指摘している。

最後に津村氏は、日本人民の、日本文化からの「異化」を問題とし、いかに人々が「人類学者」になっていくか、それはいかにして日本の文化を革命しうるか、という問いにひとしいと結論づけている。

IV

津村氏のいうように文化の革命のところまで問題を拡げてしまうならば、それはもっともなこととしかいいようがない。私も何となく体をかわされたような感がまぬがれない。本多氏の前出の論文で、逆に「筆者のメロドラマの構造」と切りかえされるゆえんであろう。しかし、大切なことは単なる言葉のやりとりに終ってはならないということである。実践活動の批判、反批判が発展的になされなければならないのであり、イデアルの次元での論争はもうたくさんである。津村氏の指摘を待つまでもなく、日常性のなかでいかに探検者たりうるかを求めつづけようとする私にとっては……。

(OB)

